

はしがき

尖閣諸島の領有をめぐる日中関係は険悪な状態にある。昨年9月の日本政府による同諸島三島の国有化をきっかけに、抗議行動が中国全土を吹き荒れ、現地の東シナ海周辺では日中双方による艦船、飛行機による睨み合いが続いている。日中国交正常化以後40年にわたる両国の交流は断絶し、日中ビジネスは委縮し、両国マスメディアは互いに罵りあっている。

日中関係は「癌」に侵されている。一般に「癌」は不治の病、死に至る病と観念されている。領土問題においては、「オレのものはオレのものだ」という自己愛に基づく信念は変えようがなく、「黙れ」とばかり相手を屈服させるしかない「戦争に至る病」である。

しかし、「癌」については慶応大学病院の近藤誠医師によって通説とは異なる「癌もどき」説が唱えられている。「癌」には放っておいても転移しない「癌もどき」と治療しても治癒しない「真正癌」とがあるというのである（『がん放置療法のすすめ』文春新書、『あなたの癌は、がんもどき』梧桐書院など）。「尖閣病」をこの「癌もどき」説のレトリックで見直してみたらどうであろう。

「尖閣病」には胡散臭い症状が至るところに露出している。ちなみに事件の現場を見てみよう。

尖閣諸島〔中国名は釣魚島〕は、何の利も生み出していない、誰も住むもののない絶海の孤島である。この島に上陸したことのある両国民はほとんどいない。尖閣諸島は過去の生活にも、今の生活にも、未来の生活にも何の関係もなく、放っておいて何の不都合もない。かつて長らく、日中の「人民」が島の存在さえ知らないまま過ごしてきたように、明日からも長らく島の存在を忘れて生活することができる。「尖閣病」は庶民〔老百姓〕の目線から見れば、まさしく「癌もどき」である。

しかし、日中ともに、政治家、軍人、官僚、学者、ジャーナリストなど偉いさんが出張り、国家の存立、国民の安全、国境の防衛、領有権の保持などと喧伝するや雲行きが一転する。何も無く何も知らない小島のために、日中両国民がこぞって怒り狂い、命を賭けて戦火を交えようと奮い立つのである。言い出しっぺの石原慎太郎が、尖閣国有化によって一党の党首の地位を手中にしたよ

うに、偉いさんが己の野心のために、「国民の皆様」や「人民大衆」を煽動しているのは疑いない。しかし、日中両国民がこぞって偉いさんたちに、たぶらかされているとも思えない。何故か？ これこそ「領土ナショナリズムの魔力」である。

冷静に自省してみたい。日中両国民のアタマには、「オレは国民だ」「国のものはオレのものだ」「オレのものはオレのものだ」「ヤツにとられてなるものか」という絶対的自己同一性の論理が反射的に成立していないか。この論理に少しでも疑いを挟めば、「オマエは国民ではない」「非国民〔売国賊〕」「売国奴〔漢奸〕」という罵詈雑言に逆襲される。

「癌」の治療はどうしたらいいのか？ 近藤誠医師は、「癌もどき」なら放っておけばいいし、「真正癌」でも症状が出るまで放って、症状が出た後でそれを抑える治療をすればいいと喝破している。本書では、丹羽宇一郎前中国大使が「尖閣でお互いに刺激するようなことをお休みしましょうね」と「お休みタイム」を提唱している。

名医の治療法は奇しくも一致した！

「放置」「お休みタイム」の間に、「国民の皆様」や「人民大衆」はアタマを冷やし、「真正癌」に抗する免疫力をつけなければならない。自己愛に基づく絶対的自己同一性の論理の呪縛から逃れるには、とりあえず三つの方策が考えられる。

第1には、両国庶民・老百姓は互いに相手の人格を尊重することである。

第2には、両国庶民・老百姓が互いに相手の言い分に耳を傾けることである。

第3には、面と向かって互いの主張を論じ合う共通の場をつくることである。

こうした結果、「オレのものはオレのもの」という言い分は完璧に近いが少し無理がある、「オマエのものはオマエのもの」という言い分も完璧に近いが少し無理がある、という理解に達するなら、免疫力がついたというものである。

例年の『中国情報源』の枠を突破して編集した異例の「特集『尖閣病』を切開する」は、以上のような観点から立案した。執筆者の皆さんに感謝するとともに、読者の忌憚のないご意見をお待ちする次第である。

2013年2月28日

蒼蒼社代表取締役兼 21世紀中国総研事務局長
中村公省